

Title	福沢手沢本J. S. Mill, Utilitarianism 再現(一)
Sub Title	Yukichi Fukuzawa's Marginal Notes on J.S. Mill, Utilitarianism (1)
Author	安西, 敏三(Anzai, Toshimitsu)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1983
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.56, No.6 (1983. 6) ,p.90- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19830628-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

福沢手沢本

J. S. Mill, Utilitarianism 再現 (1)

安西敏三

1

西欧世界と日本との文化接触の問題は、日本における近代思想の形成過程を探求しようとするものにとつて、不可避的に認識しなければならぬことの一つである。儒学・国学・仏教に代表される所謂伝統思想の展開過程が、同時に西欧の衝撃に伴つて要請された一九世紀西欧思想の撰取過程と、複雑に絡み合っているのである。

それでは日本国民が伝統的に有していた世界認識の視座が、全く異質な思想的背景をもつた西欧諸国民のそれを如何に理解したのか。この理解は日本国民の世界認識の新たな視座の再形成に如何に役立ち、そして日本国民が直面する現実に対して如何なる新たな意味を付与しうるに至つたのか。——わたしたちはこれらのことを問わなければならない。

この巨大な二つの思想の交流の意味の自覚を、福沢論言はその畢生の名著である『文明論之概略』の「緒言」において謳っている。即ち、外庄の波濤がひしひしと迫まりつつある正にその渦中にあつて、わが国における状況は、福沢をして「事々物々見るとして奇ならざるはなし」と言わしめ、さらに「極熱の火を以て極寒の水に接するが如く、人の精神に波瀾を生ずるのみならず、其内部の底に徹して転覆回旋の大騒乱を起さざるを得ざるなり」と述べさせた。そして、この眼を見張るばかりの状況から引き起こされた「全国の人民文明に進まんとするの奮発」は「一度び燃へて又これを止む可らざるもの」であり、こうした危機状況に直面した「学者」は、これを「好機会」に、文化接触の輻湊の交通整理を「至大至難の課業」として担うことになつたのである。つまり、福沢は彼自ら遭遇した日本の現実を真摯に眺め、「一身にして二生をへる」という文化上

の内面的経験を、彼の生きている日本という場を十分考慮して、自覚する。これが為には福沢は、正に異質文明（西欧）と原文明（伝統）との関連を異質文明の書を読むことによつて追求し、次いで原文明を従来に比してより一層明確に把握し、以て日本が直面している現実の混乱に応えんとしたのである。それは比較方法に基づいて日本文明を相対化する一方、物差たる西欧文明をも他方において相対化して、福沢自身の所謂文明の何たるかを、「始造」の実験を通して、考察せんとするものであつた。かかる思想的営為の担い手たることを自ら宣言した福沢は、自らの考えを人々に提示し、文化接触の意味を人々と共に考えようと決意し、『文明論之概略』の「緒言」を叙述したのである。

ところで本史料は、福沢の右の如き問題意識を検討する恰好の一史料である彼のジョン・ステイアート・ミル『功利主義』(John Stuart Mill, *Utilitarianism*, 1861)へのノート、即ち彼の手沢本(J. S. Mill, *Utilitarianism*, Fifth Edition, Longman, London, 1874)に福沢自ら行つたと考えられる様々なノート（書き込み、不審紙貼付など）の公表である。この史料を通して、わたくしたちは福沢のダイナミックな思想的営為を直に認識できうるし、従来指摘されながらも十分には明らかにされなかつた、福沢とミルとの関連の内容を具体的に知ることができるのである。さらに福沢のミル『功利主義』手沢本を考察することによつて、福沢の倫理思想、取り分け古くから今日まで流布している「功利主義者」福沢の再検討を行うことができる。例えば和辻哲郎は「文明開化の先覚者福沢諭吉は徹頭徹尾

福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再掲(一)

功利主義者であつた」(『純日本精神史研究』)と論じ、それを物語るものとして、忠臣義士の死が社会に益しないが故に無駄死にである、とする福沢の封建道徳批判をあげている。また福沢自身「利を争ふは古人の禁句なれども、利を争ふは即ち理を争ふことなり」と『文明論之概略』において述べて、徳川時代に正統的世界像を提供する立場にあつた朱子学における否定的概念たる「利」を朱子学の根本概念ともいふべき「理」と結びつけることによつて、「利」の肯定的概念への意味転換を図つている。然しながら功利主義の定義が一般に曖昧であるように、福沢の「功利主義者」としての像もまた曖昧である。人は「功利主義者」福沢ときいて、紙幣の肖像画と結びつくような拝金宗福沢を想起するかもしれない。あるいは実学を提倡し、智徳の進歩を信じ、品行方正な実業家を養成しようとした教育者を思い浮べるかもしれない。ミル『功利主義』を読み、ミルとともに功利主義についての考えを廻らしている福沢の姿を目の当りにみることによつて、こうした従来からある「功利主義者」としての福沢像に新たな意味付、ないし修正を本史料はわたくしたちに確實にもたらすと思われる。

福沢のミル『功利主義』手沢本へのノートについての言及は、これまでに二度ほど行われている。川合貞一「ミルの『功利論』の書き入れより見たる福沢先生」(『三田評論』四〇六号、昭和六年、第六号、一―八頁。のち川合貞一『福沢諭吉先生を語る』目黒書店、昭和一六年に再録)、小泉信三『読書論』(『岩波新書』昭和五年、五〇―五四頁。のち富田正文土橋俊一編『小泉信三全集』第一四卷文芸春秋社、昭和四二年に

九一 (一三〇三)

再録)の二篇が主なものである。けれどもこれらは紹介の域を出ず、しかも書き込みの一部についてであつて、総てに及ぶものではない。さらに明治一〇年前後の福沢の読書・思索の跡を知る絶好の史料(富田正文「後記」『慶應義塾編纂「福沢論吉全集」第七巻、岩波書店、昭和三五年、七一五頁)と見做されている『覚書』が、全集や著作集に収録され、広く日の目をみているのに反して、同じ時期に読んだ『ミル「功利主義」』についての福沢のノートについては、依然として筐底に秘したままである。このことは、福沢研究者にとつてはいうまでもなく、地下に眠る福沢自身にとつても不満にちがいない。福沢は『ミル「功利主義」』のある長文の書き込みの最後に「明治九年四月十三日論吉誌」とわざわざ記して、この手沢本が「覚書」としての位置を示すことを自ら表明しているのである。ここから既に公表されている『覚書』には、ミルに関する言及が一つとしてないことがわかる。他の手沢本、例えば書き込みが現存する福沢手沢本の中では最も多いハーバート・スペンサー『社会学研究』(Herbert Spencer, *The Study of Sociology*, D. Appleton, New York, 1874)には「論吉誌」といつた書き込みはなく、従つて『覚書』に改めて書き留めることになるのである。こうした点からも『ミル「功利主義」』の福沢のノートの公表自体、十分意味があるのである。

さて次に本史料を読者が理解する上で必要な記述上の前提を、二三述べて置きたい。福沢手沢本再現ではあるけれども、福沢手沢本そのものを掲載して、福沢の様々なノートそのものをここに記すことは、本誌第五四巻第一号にて紹介した「福沢手沢本 A. d. To-

queville, *Democracy in America*, Transl. by H. Reeves, 再現」と同様、技術上不可能である。そこで私は以下においてこの「クヴィル」の場合にならつて、福沢のノートが明確なものについての部分の総てを記し、3において福沢のノートが疑わしいものを頁数と行数で以て表にして記す。

2での紹介は、福沢のノートが少しでもある箇所のパラグラフ全体の原文に邦訳を加えてそのまま記述順に記す。原文の最後に付した()内の最初の数字は福沢手沢本の頁数であり、次の数字は John Stuart Mill, *Essays on Ethics, Religion and Society*, In *Collected Works of John Stuart Mill*, Ed. J. M. Robson, Vol. X, University of Toronto Press, Canada, 1969, 所収の「Utilitarianism」の頁数である。邦訳文は、主として伊原吉之助訳「功利主義論」(関嘉彦責任編集『世界の名著』第三八巻「ヘンサム J. S. ミル」中央公論社、昭和四二年、所収)からのものによる(若干訂正したところがある)。邦訳文の最後に付した()内の最初の数字はこの伊原訳本の頁数であり、次の数字は、水田珠枝・永井義雄訳「功利主義」(水田洋訳者代表『世界の大思想』第二期第六巻「ミル」河出書房、昭和四二年、所収)の頁数である。(後者の訳書は前者の訳と共に紹介者が原文を理解するのに役立つた。前者の訳者に対しては言うに及ばず、後者の訳者に対しても感謝したい。)

史料中の記号は、Ⅰが頁数の変わることを、⑥が赤の不審紙貼付箇所を、⑦が不審紙貼付跡が明確な箇所を、+が不審紙貼付跡が疑わしい箇所を、④が頁の隅にある不審紙貼付跡が疑わしい箇所を各

々示す(十や④は本来ならば3で紹介するものであるが、2で紹介する史料についているが故に2で記す)。鉛筆や毛筆による余白への書き込みについては、原文の後の「」の中に記す。但し、サイドライン、アンダーライン、○印、たんなるチェックなどについてはそのまゝ原文の中に記す。

3の場合、通し番号は2の場合と区別するためにアラビア数字で記す。手沢本の頁数の他にこれに対応する前記 *Collected Works*, 『世界の名著』『世界の大思想』の頁数をも記す。行数は点線で区切つて頁数の下に記す。その際所謂柱は数えないし、洋書の場合は上から、邦訳書の場合は右から数える。

その他、私が気付いた点、あるいは補足説明を要する所は、やはり「」の中に記す。

最後に本史料は一九七八年二月三日に脱稿した「福沢諭吉とJ・S・ミル『功利主義』」(慶應義塾史資料室に一部寄贈)の史料部分の紹介である。当時この福沢手沢本の書き込み文字の判読その他について、富田正文、丸山真男、会田倉吉の諸先生のお世話になった。とりわけ、会田倉吉先生は、私の本手沢本書き込み判読の最終的検討の際、協力され、その翌日クモ膜下出血でお倒れになり、一週間後逝去された(一九七六年一〇月二九日)。慎んで哀悼の意を表するとともに、未だ本論の公表が伴わない状態であるけれども、本史料を先生の御霊前に捧げるものである。尚三田情報センターの田中正之氏には史料閲覧に際し、お世話になった。前記の諸先生同様記して感謝したい。

福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再現(一)

2

〔M9. 4-4

UTILITARIANISM.

CHAPTER I.

GENERAL REMARKS.

(1.205)

〔M9. 4-4.〕は通読開始を示す鉛筆による書き込み。〕

功利主義

第一章 総説

(917・117)

〔THERE are few circumstances among those which make up the present condition of human knowledge, more unlike what might have been expected, or more significant of the backward state in which speculation on the most important subjects still lingers, than the little progress which has been made in the decision of the controversy respecting the criterion of right and wrong. (1.205)

〔右余白に「ユーロアラウス」と鉛筆による書き込みがある。〕人間の知識に関する現在の状況をなしている諸事情のなかで、意外に思われるのは、あるいは最も大切な問題についての思索がいまなお遅れた状態のまま停滞しているのをよくあらわしているのは、正邪の規準についての論争の決着がほとんど進歩していない、と

九三 (一三〇五)

のいふは、*utilitarianism* 神譯 (1)

⑩ It is true that similar confusion and uncertainty, and in some cases similar discordance, exist respecting the first principles of all the sciences, not excepting that which is deemed the most certain of them, mathematics ; without much impairing, generally indeed without impairing at all, the trustworthiness of the conclusions of those sciences. An apparent anomaly, the explanation of which is, that the detailed doctrines of a science are not usually deduced from, nor depend for their evidence upon, what are called its first principles. Were it not so, there would be no science more precarious, or whose conclusions were more insufficiently made out, than algebra ; which derives none of its certainty from what are commonly taught to learners as its elements, since these, as laid down by some of its most eminent teachers, are as full of fictions as English law, and of mysteries as theology. ⊗ The truths which are ultimately accepted as the first principles of a science, are really the last results of metaphysical analysis, practised on the elementarily notions with which the science is conversant ; and their relation to the science is not that of foundations to an edifice, but of roots to a tree, which may perform their office equally well though they be

never dug down to and exposed to light. But though in science the particular truths precede the general theory, the contrary might be expected to be the case with a practical art, such as morals or legislation. All action is for the sake of some end, and rules of action, it seems natural to suppose, must take their whole character and colour from the end to which they are subservient. When we engage in a pursuit, a clear and precise conception of what we are pursuing would seem to be the first thing we need, instead of the last we are to look forward to. A test of right and wrong ⊗ must be the means, one would think, of ascertaining what is right or wrong, and not a consequence of having already ascertained it. (2—3 . 205—206)

〔正邪の規準をめぐむ論争へ〕同じやいな混乱し不確実なものは同じやいな不一致だが、あらゆる科学の第一原理に関して存在していることは本質的であつて、もともと確実な科学とみなされている数学の例外ではない。だからといつて、これらの科学の結論に対する信頼性が大きく損われるわけではない。事実、一般的には少しも損われないのである。一見おかしく見えるが、ある科学の細部の学説は、*utility*、その科学の第一原理なるものから導きだされるのではなくて、第一原理にちひして証明される、*utility* から説明できる。もしそうでなければ、代数学ほど根拠が薄弱で、証明不十分な結論をもつた科学はなごころとなる。代数学の確実性は、学習

者がらつう基本原理として教わるものから引き出されているのではない。というのは、それらの原理は、代数学のもつともすぐれた教師が何人が言明しているとおり、イギリスの法律のように擬制にみち、神学のように神秘にみちているからである。ある科学の第一原理として最終的に受け入れられる真理は、実はその科学と密接な関係にある基本概念を形而上学的に分析した結果最後に得られたものである。科学とこうした第一原理との関係は、建物と土台との関係ではなく、地上にみえる樹木と地下に張つた根との関係である。根は、掘り起こされ光にさらされることにならないけれども、「土台と同じようにその任務をちやんと果たしているのである。しかし、科学においては個々の真理が一般理論に先だつとしても、道徳や立法のような実践的な学問については、これと逆の場合が予想される。行為はすべて、なんらかの目的を目ざしている。だから、こうした目的が、行為の規則に性格を与え、色づけをするとき、そのものが当然であろう。われわれが何事かを追求するとき、追求しているものの明瞭正確な概念はまづさきに必要なのであつて、最後待たず望むものではないだろう。正義と邪悪の判定は、何が正義であり、何が邪悪であるかを確かめる手段でなければならず、すべてそれを確かめた結果であつてはならないと思われる。

(論十一 節上・四十一—四十七)

On the present occasion, I shall, without further discussion of the other theories, attempt to contribute something towards the understanding and appreciation of the Utilitarianism

福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再編 (一)

itarian or Happiness theory, and towards such proof as it is susceptible of. It is evident that this cannot be proof in the ordinary and popular meaning of the term. Questions of ultimate ends are not amenable to direct proof. Whatever can be proved to be good, must be so by being shown to be a means to something admitted to be good without proof. The medical art is proved to be good, by its conducing to health; but how is it possible to prove that health is good? The art of music is good, for the reason, among others, that it produces pleasure; but what proof is it possible to give that pleasure is good? If, then, it is asserted that there is a comprehensive formula, including all things which are in themselves good, and that whatever else is good, is not so as an end, but as a mean, the formula may be accepted or rejected, but is not a subject of what is commonly understood by proof. We are not, however, to infer that its acceptance or rejection must depend on blind impulse, or arbitrary choice. There is a larger meaning of the word proof, in which this question is as amenable to it as any other of the disputed questions of philosophy. The subject is within the cognizance of the rational faculty; and neither does that faculty deal with it solely in the way of intuition.

九五 (一三〇中)

↑ Considerations may be presented capable of determining the intellect either to give or withhold its assent to the doctrine; and this is equivalent to proof. (6・207—208)

「左下余白に「1道致」と鉛筆による書き込みがある。「致」は「理」とも判読でき得るが正しくは分らない。」

私はいまのところ、これ以上、他の諸説について論議するのをやめて、功利または幸福の理論を理解し評価するため、むしろはそれを証明可能なため、微力を尽くそう。この証明が、どうも一般に使われている意味での証明でありえないことは、明らかである。究極目的にかかわる問題は、直接証明できるものではない。善であることを証明するには、証明ぬきで善と認められるなにかの手段として示されることによつて、そうであるにちがいない。たとえば、医療は健康を増進するから善なのだけども、健康が善であることはどうすれば証明できるだろうか。また、音楽という芸術が善であるのは、とりわけそれが快楽を生み出すからであるが、快楽が善であるという証明をどうしてなしうるのであろうか。だからもしここに、それ自体善であるものをすべて含む包括的な公式があり、これ以外のものはどれも目的としてではなく手段として善だと主張されれば、この公式は、承認したり否認したりできても、どうの意味での証明の対象とはならないのである。だからどうしてわれわれは、この公式の承認や否認が、めくら減法の衝動や気まぐな選択によらなければならないと推論しないであらう。証明をどうしてとはにはもつと広い意味があり、この広いほうの意味でならこの問

題も証明できるとしては、哲学上の他の係争問題と同じである。この問題を直観という方法で処理するだけではない。知性がこの学説に同意するかどうかを決定しようとする考察が示されるであらう。そしてこれは証明と同じことである。(編下—46上・111下—112下)

(B) ……(省略)…… Those who know anything about the matter are aware that every writer, from Epicurus to Bentham, who maintained the theory of utility, meant by it, not something to be contradistinguished from pleasure, but pleasure itself, together with exemption from pain; and instead of opposing the useful to the agreeable or the ornamental, have always declared that the useful means these, among other things. Yet the common herd, including the herd of writers, not only in newspapers and periodicals, but in books of weight and pretension, are perpetually falling into this shallow mistake. Having caught up the word utilitarian, while knowing nothing whatever about it but its sound, they habitually express by it the rejection, or the neglect, of pleasure in some of its forms; of beauty, of ornament, or of amusement. Nor is the term thus ignorantly misapplied solely in disparagement, but occasionally in compliment; as though it implied superiority to frivolity and the mere pleasures of the moment. And this perverted use is the only one in which

the word is popularly known, and the one from which the new generation are acquiring their sole notion of its meaning. Those who introduced the word, but who had for many years discontinued it as a distinctive appellation, may well feel themselves called upon to resume it, if by doing so they can hope to contribute anything towards rescuing it from this utter degradation.* (8—9. 209)

〔右下余白に「一浅墓ナル」と鉛筆による書き込みがある。尚文末の*は原文のものである。〕

この「功利と快楽について」の問題について多少とも知っている人ならば、エピクトロスからヘンサムに至る功利の理論を主張したこの著者も、功利という語で快楽と対照して区別される何物かを意味したのではなく、苦痛の回避をも含めて、快楽そのものを意味したと、さらに有益なものを、このろいものや裝飾的なものと対立させる代わりに、有益なものとは、とりわけ、これらのものを意味するといつも明言してきたことを感じている。だが庶民は、著者の一群をも含めて、新聞や雑誌ばかりでなく、重厚でもつたいあつた書物の中でも、たえずこの種の浅はかな誤りに陥っている。功利主義的という語をとらえたときに、それについては発音以外の何ものをも知らないくせに、美とか裝飾とか娯楽といった種類の快楽を拒絶し無視することが功利主義的であるとこの連中は言いふらすのである。この語がかくの如く内容を知らないために誤用されるのは、けなされる場合だけではなく、ときにほめられる場合にもそのうなのである。まるでこの語が軽薄さや単なる利刺的快楽以上の優れ

たものを意味するところであらう。そして、功利主義的という語が一般に知られているのは、このような歪められた用法を通じてであり、新しい世代の人たちがこの語の意味を知るのも、他ならぬこの歪められた用法によつてなのである。特別な名称としてこの語を使い始めながら、長年の間それを使わなかつた人間が、本来の意味でそれを使い直すことによつて、この様な全くの墮落からこの語を救うのに多少とも貢献できる望みがあると知つたら、そうする義務を感じるのは当然であらう。(編上—467上—121上—122上)

(*) Now, such a theory of life excites in many minds, and among them in some of the most estimable in feeling and purpose, inveterate dislike. To suppose that life has (as they express it) no higher end than pleasure——no better and nobler object of desire and pursuit——they designate as utterly mean and grovelling; as a doctrine worthy only of swine, to whom the followers of Epicurus were, at a very early period, contemptuously likened; and modern holders of the doctrine are occasionally made the subject of equally polite comparisons by its German, French, and English assailants. (10, 210)

〔左下余白に「一比較スル」と鉛筆による書き込みがある。〕
ところでこの「目的として望ましいものは快楽及び苦痛のないことである」といつた「人生観は、多くの人々のなかでもとりわけその感情において、また意図においても尊重すべき人々に、抜きがたい

嫌惡の念をよび起こしている。(この人たちによれば) 人生には快樂より高級な目的はないと考えること——熱望し追求する対象として快樂より善く快樂より高貴なものはないと考えること——をまつたく野卑下賤とみなし、豚向きの学説とこの人たちは称する。豚とは、はるか昔にエピクロス派の人たちが侮蔑的なぞらえられた動物であつたし、また現代この学説を奉ずる者は、ドイツ、フランス、そしてイギリスの攻撃者からしばしば同じ上品な比較の対象になれてゐるのである。(467下—468上・122下)

(B) If I am asked, what I mean by difference of quality in pleasures, or what makes one pleasure more valuable than another, merely as a pleasure, except its being greater in amount, there is but one possible answer. Of two pleasures, if there be one to which all or almost all who have experience of both give a decided preference, irrespective of any feeling of moral obligation to prefer it, that is the more desirable pleasure. If one of the two is, by those who are competently acquainted with both, placed so far above the other that they prefer it, even though knowing it to be attended with a greater amount of discontent, and would not resign it for any quantity of the other pleasure which their nature is capable of, we are justified in ascribing to the preferred enjoyment a superiority in quality, so far outweighing quantity as to

render it, in comparison, of small account. (12. 212)
 それでは快樂の質の差とは何を意味するのか。量が多いということではなく、快樂そのものとして他の快樂より価値が大きいとされるのは何によるのか。こうたずねられたら、考えられる答えは一つしかない。二つの快樂のうち両方を経験した人が全部またはほぼ全部、道徳的義務感とは關係なく、決然と選ぶほうがより望ましい快樂である。両方をよく知つてゐる人々が二つの快樂の一方をはるかに高く評価して、他方をより大きな不満がともなうことを承知のうえで選び、他方の快樂を味わえるかぎりたゞふり与えられても、元の快樂を捨てようとしなければ、選ばれた快樂の享受が質的に優れていて、量を圧倒しているため、比較するべき量をほゞ問題になつておぼん、と考へておしつかえなげ。(469上・123下)

(C) + Now it is an unquestionable fact that those who are equally acquainted with, and equally capable of appreciating and enjoying, both, do give a most marked preference to the manner of existence which employs their higher faculties. Few human creatures would consent to be changed into any of the lower animals, for a promise of the fullest allowance of a beast's pleasures; no intelligent human being would consent to be a fool, no instructed person would be an ignoramus, no person of feeling and conscience would be selfish and base, even though they should be persuaded that the fool, the dunce, or the rascal

is better satisfied with his lot than they are with theirs. They \parallel would not resign what they possess more than he, for the most complete satisfaction of all the desires which they have in common with him. If they ever fancy they would, it is only in cases of unhappiness so extreme, that to escape from it they would exchange their lot for almost any other, however undesirable in their own eyes. A being of higher faculties requires more to make him happy, is capable probably of more acute suffering, and is certainly accessible to it at more points, than one of an inferior type; but in spite of these liabilities, he can never really wish to sink into what he feels to be a lower grade of existence. We may give what explanation we please of this unwillingness; we may attribute it to pride, a name which is given indiscriminately to some of the most and to some of the least estimable feelings of which mankind are capable; we may refer it to the love of liberty and personal independence, an appeal to which was with the Stoics one of the most effective means for the inculcation of it; to the love of power, or to the love of excitement, both of which do really enter into and contribute to it; but its most appropriate appellation is a sense of dignity, which all human beings possess in one form or other,

稟賦皆具來 J. S. Mill, *Utilitarianism* 準繫 (1)

and in some, though by no means in exact, proportion to their higher faculties, and which is so essential a part of the happiness of those in whom it is strong, that nothing which conflicts with it could be, otherwise than momentarily, an object of desire to them. Whoever supposes that this preference takes place at a sacrifice of happiness — that the superior being, in anything like equal circumstances, is not happier than the inferior — confounds the two very different ideas, of happiness, and content. \parallel It is indisputable that the being whose capacities of enjoyment are low, has the greatest chance of having them fully satisfied; and a highly-endowed being will always feel that any happiness which he can look for, as the world is constituted, is imperfect. But he can learn to bear its imperfections, if they are at all bearable; and they will not make him envy the being who is indeed unconscious of the imperfections, but only because he feels not at all the good which those imperfections qualify. It is better to be a human being dissatisfied than a pig satisfied; better to be Socrates dissatisfied than a fool satisfied. And if the fool, or the pig, is of a different opinion, it is because they only know their own side of the question. The other party to the comparison knows

尺尺 (11111)

both sides. (12-14・211-212)

〔一三頁(手沢本の頁数、以下解説部分の頁数も同様)の 'a sense of dignity' の指示ライン(「」)の右余白に「其ノ名ヲ當ルニハデグニチノセンスト云ハソカ」と鉛筆による書き込みがある。また同頁右下余白に「1無情木石ノ如シ」と鉛筆による書き込みと、その左に「幸福ト満足トハ自カラ別アリ」と毛筆による書き込みがある。さらに一四頁左余白に「満足スル歟ニ為ルハ不満足ナル人ト為ルニ若カズ」と毛筆による書き込みがある。尚一三頁の、studs から四行下の which に至るまで鉛筆によるラインが縦に文と交差する形でひかれている。〕

ところで、両方「量的快楽と質的快楽」を等しく知り、等しく感得し享受できる人々が、自分のもつている高級な能力を使うような生活態度を断然選びとることは疑いのない事実である。畜生の快楽をたづぶりと与える約束がされたからといって、何かの下等動物に変わることに同意する人はまずなからう。馬鹿やのろまや悪者のほうが自分たち以上に自己の運命に満足していることを知ったところで、頭のいい人が馬鹿にならうとは考えないだろうし、教育ある人間が無学者に、親切で良心的な人が下劣な我利我利盲者にならうとは思わないだろう。こういう人たちは、馬鹿者たちと共通してもつている欲望を全部、もつとも完全に満足させられても、馬鹿者たちより余分にもつているものを放棄しないだろう。この人たちが放棄を考えるようなことがあるとすれば、それは、極度の不幸に陥つて、たとえ彼らからみてどんなに望ましくなくても、自分の運命を他人の運命と取り換える他に、その不幸を免れる途がないときに限られよう。この下劣な存在に身を落としたくない、というためらいにいつい

ては、なんとしても説明できよう。たとえばそれを誇りに帰すこともできる。誇りとは、人類がもつことのできるもつとも尊敬すべき感情につけられた名称だが、また同時にもつとも尊敬すべからざる感情の名称でもある。また、これを、自由と個人の独立への愛に帰することができよう。こういうものに訴えることが、ストア派にとつて、このためらいの気持を教え込むもつとも有効な手段であつた。権力への愛、または感激への愛に帰することもできよう。これらは現に、この下劣なものに身を落としたくない気持の中にはいり込み、この気持を助長している。だが、それにいちばんふさわしい呼び名は、尊嚴の感覺である。人間はだれでも、なんらかの形で尊嚴の感覺をもつており、高級な能力と、厳密にはないが、ある程度比例している。この感覺が強い者にとつては、これと衝突するものは、瞬時を除けば、いつさい欲求の対象たりえない程、彼の幸福の本質的部分をなしている。この「尊嚴への」選択が、幸福を犠牲にして行われると想像する者——同じような環境のもとでは、すぐれた人間は劣つた人間より幸福でない想像する者——は、幸福と満足という二つの非常にちがう觀念を混同しているのである。感受能力の低い者は、それを十分満足させる機会にもつとも恵まれていないが、豊かな天分をもつ者は、いつも、自分の求めうる幸福が、この世では不完全なものでしかないと感じるのであることはいうまでもない。しかしこういう人も、不完全さが忍べるものである限り、忍ぶことを習得できる。そして、不完全だからといって、不完全さをまるで意識しない人間を羨んだりしないだろう。不完全さを意識しないのは、このような不完全さをもつ(高級な)善を感じる能力が

全然ないといふことだからである。満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよく、満足した馬鹿であるより不満足なソクソクであるほうがよい。そして、その馬鹿なり豚なりがこれと違つた意見をせしむるとして、それは彼らがこの問題でどうして自分だけの側しか知らなかつたかである。この比較の相手方は、両方の側を知つてゐるであらう。(論十一節一、節十一節一)

(9) It may be objected, that many who are capable of the higher pleasures, occasionally, under the influence of temptation, postpone them to the lower. But this is quite compatible with a full appreciation of the intrinsic superiority of the higher. Men often, from infirmity of character, make their election for the nearer good, though they know it to be the less valuable; and this no less when the choice is between two bodily pleasures, than when it is between bodily and mental. They pursue sensual indulgences to the injury of health, though perfectly aware that health is the greater good. It may be further objected, that many who begin with youthful enthusiasm for everything noble, as they advance in years sink into indolence and selfishness. But I do not believe that those who undergo this very common change, voluntarily choose the lower description of pleasures in preference to the higher. I believe that before they devote themselves

福沢手塚氏 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再照 (1)

exclusively to the one, they have already become incapable of the other. Capacity for the nobler feelings is in most natures a very tender plant, easily killed, not only by hostile influences, but by mere want of sustenance; and in the majority of young persons it speedily dies away if the occupations to which their position in life has devoted them, and the society into which it has thrown them, are not favourable to keeping that higher capacity in exercise. Men lose their high aspirations as they lose their intellectual tastes, because they have not time or opportunity for indulging them; and they addict themselves to inferior pleasures, not because they deliberately prefer them, but because they are either the only ones to which they have access, or the only ones which they are any longer capable of enjoying. It may be questioned whether any one who has remained equally susceptible to both classes of pleasures, ever knowingly and calmly preferred the lower; though many, in all ages, have broken down in an ineffectual attempt to combine both. (14—15. 212—213)

〔十五頁の右余白に〕「ノーブルフェーリングン若キ草木ノ如シ社會中ニ交ル己ガ地位ト其生活ノ有様ニ由テ容易ニ消滅ス可シ今ノ少年ガ妻ヲ娶リ官員ニ為リテ後ニ氣力ヲ失フガ如シナル社会中ニ勸辨

一〇一 (一三三三)

シテ賤シキ快樂ヲ悦テ尚高ノ氣風ヲ投棄セント欲スル者ハアル可ラズ必ス心ノ内ニハ一點ノ廉恥有スルモノアリ旧友ガ折々尋問ニ來リ或ハ近邊ニ居ラ修サントスル杯再ヒ近カントスルガ如キハ即チノールフヒリングノ未ダ全ク活死セサル者ナリ蓋シ人ニ交ルノ要ハ此フヒリングヲ勉テ養成スニ在リ」と毛筆による書き込みがある。

反論する人は、高級な快樂の感受能力をもつ人の多くが、ときどき誘惑に負けてそれらを捨て、低级な快樂に走るではないか、と言うかもしれない。だがこのことは、高級な快樂が本質的にすぐれていることを全面的に承認することと少しも矛盾しない。人はともすれば、性格の弱さから、価値が低いとわかつていながら、手近の善を選ぶことがある。このことは、肉体の快樂と精神の快樂とのあいだで起るだけでなく、二つの肉体的快樂を選択するときにも起りつてくる。たとえば、人間は肉欲にふけて健康を損うことがある。健康がより大きい善であることを重々承知のうえである。さらに反論する人は、若いときに高貴なものに熱中した人の多くが、年をとるにつれて無精になり、利己主義に陥つてゆくのはどういふわけか、とききであらう。しかし、このごくありふれた変化をたどる人々が、自分から進んで高級な快樂を捨て、低级な快樂を選んだとは、どういふ考えられない。私の信ずるところでは、低级な快樂に身をゆだねる前に、彼らはすでに高級な快樂が感じられなくなつているのである。高貴な感情を受容する能力は元來が弱い草木同然で、風雨にさらされたときはもちろんのこと、すこし養分が不足す

るだけですぐ枯れしぼんでしまう。だから大多数の青年にとつて、社会的地位に基づいた職業や、その地位によつて投げ込まれた社会が、この高級な受容能力を発揮しつづけるのに不向きならば、たちまち消滅してしまふのである。知的趣味を失えば、人々は高い向上心を失う。それらを味わう時間も機会もなくなるからである。従つて彼らが劣等な快樂に身をゆだねるのは、熟考の末ではなく、それしか知らず、それしか味わたることがないからにすぎない。両等級の快樂を等しく感知できる能力をもちつづけた人が、承知の上で平然と低级な快樂を選んだことがこれまであるかどうかは疑わしい。もつとも、多くの人がいつの世にも、両等級の快樂も同時に実現しようとして失敗しているのであるが。(470下-471下・125上-125下)

(16) From this verdict of the only competent judges, I apprehend there can be no appeal. On a question which is the best worth having of two pleasures, or which of two modes of existence is the most grateful to the feelings, apart from its moral attributes and from its consequences, the judgment of those who are qualified by knowledge of both, or, if they differ, that of the majority among them, must be admitted as final. And there needs be the less hesitation to accept this judgment respecting the quality of pleasures, since there is no other tribunal to be referred to even on the question of quantity. What means are there of determining which is the acutest of

two pains, or the intensest of two pleasurable sensations, except the general suffrage of those who are familiar with both? Neither pains nor pleasures are homogeneous, and pain is always heterogeneous with pleasure. What is there to decide whether a particular pleasure is worth purchasing at the cost of a particular pain, except the feelings and judgment of the experienced? When, therefore, those feelings and judgment declare the pleasures derived from the higher faculties to be preferable *in kind*, apart from the question of intensity, to those of which the animal nature, disjoined from the higher faculties, is susceptible, they are entitled on this subject to the same regard.

(15—16・213)

〔最初のラインは一六頁の最上に記われているオー・バー・ラインである。また一六頁の purchasing から三行下の those に至るまで鉛筆によるラインが文と交差する形でひかれてゐる。〕

以上〔鉛の書き〕は、この問題に関する唯一の有資格者である裁判官たちのくだした判定であるから、もはや上告の余地なし、と私は認める。二つの快楽のうちどちらがもつて値するか、また二つのあり方のうちどちらが快適か——その道徳的特質や結果は別問題とする——という問題については、両方の知識をもつ有資格者たちの判断が、また判断が食い違ふときはその過半数の判断が、最終的なものと認められねばならない。それに、快楽の量の問題について、これ以外に訴えるべき法廷がなつたから、質に関する彼ら

福沢手沢本 J. S. Mill, Utilitarianism 再現 (1)

の判断を受け容れるのをためらう必要はさらに少ないのである。二つの苦痛のいずれがもつとも強烈かを定めるのに、両方ともよく知っている人々全部の意思表示の他にどんな手段があるだろうか。苦痛と快楽とを比べ、同質ではない。まして苦痛と快楽とは常に異質的である。とすれば、特定の快楽が特定の苦痛という費用を払つてまで購入するに値するかどうかを決めるものが、経験者の感情及び判断以外にあるのだろうか。こういう次第だから、経験者の感情と判断が、高級な素質の与える快楽のほうが高級な素質を持たない動物の本性の感じる快楽よりも、強度はともかく、種類の点で好ましく宣言するべきである。この経験者の感情や判断は前の場合と同様に尊重されて然るべきである。(15—16・213—214)

Ⓛ I have dwelt on this point, as being a necessary part of a perfectly just conception of Utility or Happiness, considered as the directive rule of human conduct. But it is by no means an indispensable condition to the acceptance of the utilitarian standard; for that standard is not the agent's own greatest happiness, but the greatest amount of happiness altogether; and if it may possibly be doubted whether a noble character is always the happier for its nobleness, there can be no doubt that it makes other people happier, and that the world in general is immensely a gainer by it. Utilitarianism, therefore, could only attain its end by the general cultivation of nobleness of character,

一〇三 (一三三頁)

even if each individual were only benefited by the nobleness of others, and his own, so far as happiness is concerned, were a sheer deduction from the benefit. But the bare enunciation of such an absurdity as this last, renders refutation superfluous. (16・213—214)

〔左余白に「此大幸福ナルモノハ畜ニ自ニ個人ノ幸福ノミニ非ズ」と毛筆による書き込みがある。・印は毛筆によるものである。〕

以上〔⑤の続き〕詳しく論じたのは、この点が人間行為の指導準則としての「功利」または「幸福」の完全に正しい概念にとつて、欠くことのできない一部分をなすからである。もつともそれは、功利主義の規準を認める上で不可欠な条件ではけつしてない。とゞうのは、功利主義の規準は行為者自身の最大幸福ではなく、幸福の総計の最大量なのだから。従つて高貴な人は、その高貴さの故に常に他人より幸福であるかどうかは疑問の余地があるとしても、その人の高貴さが他人の幸福を増し、世間一般がそれから計り知れない思想を受けていることは疑いない。ここからわかるように、功利主義は高貴な性格を広く社会全体に開発したとき始めてその目的を達することができるのである。たとえ各個人は他人の高貴さから恩恵を受けるだけで、こと幸福に関する限り自分自身の高貴さからはなんの恩恵も受けないとしてもそうなのである。だが今述べたような馬鹿馬鹿しいことは、はつきり口に出して言つてしまえば、わざわざ反論するまでもない。

⑤ According to the Greatest Happiness Principle, as above

explained, the ultimate end, with reference to and for the sake of which all other things are desirable (whether we are considering our own good or that of other people), is an existence exempt as far as possible from pain, and as rich as possible in enjoyments, both in point of quantity and quality; the test of quality, and the rule for measuring it against quantity, being the preference felt by those who, in their opportunities of experience, to which must be added their habits of self-consciousness and self-observation, are best furnished with the means of comparison. This, being, according to the utilitarian opinion, the end of human action, is necessarily also the standard of morality; which may accordingly be defined, the rules and precepts for human conduct, by the observance of which an existence such as has been described might be, to the greatest extent possible, secured to all mankind; and not to them only, but, so far as the nature of things admits, to the whole sentient creation. (17・214)

〔右余白に「大幸福ノ旨ハ苦痛ヲ去テ楽ニ富ムニ在リ而シテ其幸福ノ性質ヲ判断スルニハ自誠自存ノ習慣ヲ兼テ事物ノ實驗ニ富ミ利害得失ヲ比較スルノ働アル人物ヲ要ス結局世ニ先テ人ヲ導キ一般ノ手本ヲ示スハ学者ノ職分ナリ今ノ学者決シテ迂闊ニ日ヲ消ス可ラズ行状ハ正シカラザル可ラズ働ハ活潑ナラザル可ラズ」と毛筆による

書き込みがある。]

「最大幸福の原理」によれば、まことに説明したように、究極目的は量、質ともてできるだけ苦痛を免れ、できるだけ享受が豊かな生存であり、他のあらゆるものが望ましい（われわれ自身の善を考へるにせよ他人の善を考へるにせよ）のは、この究極目的に関連するからであり、究極目的のためなのである。質の判定規準、及び質と量とを比較考量する規準は、経験する機会を持つたときに——経験の他に自己意識と自己観察の習慣が必要であるが——比較する手段をもつともよく備へた人々の行つた選択である。功利主義者の意見によると、これは人間活動の目的のだから必然的にまた道德の規準でなければならぬ。ここで道德の規準を定義すれば、それは人間行為のための規準であり教訓であつて、これに従がえば、なきに述べたような生存が最大可能の範囲で全人類に保障されるものであり、といえよう。人類に限らず、本性上可能な限り、生きとし生けるもの全部に保障されるものである。（472下—473上・128下—127上）

③ Against this doctrine, however, arises another class of objectors, who say that happiness, in any form, cannot be the rational purpose of human life and action; because, in the first place, it is unattainable: and they contemptuously ask, What right hast thou to be happy? a question which Mr. Carlyle clenchs by the addition, What right, a short time ago, hadst thou even to be? Next, they say, that men can do *without* happiness; that all noble

福沢平次本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再訳 (1)

human beings have felt this, and could not have become noble but by learning the lesson of Entsagen, or renunciation: which lesson, thoroughly learnt and submitted to, they affirm to be the beginning and necessary condition of all virtue. (17—18・214)

〔一七頁下余白に「エントザゼン 自カラ禁ズルノ教」と鉛筆による書き込みがある。〕

しかしながら以上〔③の続き〕の説に対して別の反対論者が立つて言うであろう。幸福はどんな形のものであれ、人間の生活や行為の合理的な目標とはならない。なぜなら、そもそも幸福は達成できないものであるから、と。そして彼らはいかにも見下げた態度で反問する。お前は幸福たりうるいかなる権利をもつのか、と。カール・イル氏は次のように付け加えてこの問に輪をかける。つい先程までお前は存在についてさえ、なんの権利をもつていたのか、と。ついで彼らは言う。人間は幸福なしにやつていける。高貴な人間は誰でもこう感じており、エントザゼン、つまり自制という教訓を学んだからこそ高貴になれたのだ、と。この教訓を徹底的に学び、これに従うことがすべの徳の始まりであり、必要条件なのである、と彼は断言するのである。（473上—473下・127上）

④ The first of these objections would go to the root of the matter were it well founded; for if no happiness is to be had at all by human beings, the attainment of it cannot be the end of morality, or of any rational conduct.

一〇五 (111—17)

Though, even in that case, something might still be said for the utilitarian theory; since utility includes not solely the pursuit of happiness, but the prevention or mitigation of unhappiness; and if the former aim be chimerical, there will be all the greater scope and more imperative need for the latter, so long at least as mankind think fit to live, and do not take refuge in the simultaneous act of suicide recommended under certain conditions by Novalis. When, however, it is thus positively asserted to be impossible that human life should be happy, the assertion, if not something like a verbal quibble, is at least an exaggeration. If by happiness be meant a continuity of highly pleasurable excitement, it is evident enough that this is impossible. A state of exalted pleasure lasts only moments, or in some cases, and with some intermissions, hours or days, and is the occasional brilliant flash of enjoyment, not its permanent and steady flame. Of this the philosophers who have taught that happiness is the end of life were as fully aware as those who taunt them. The happiness which they meant was not a life of rapture; but moments of such, in an existence made up of few and transitory pains, many and various pleasures, with a decided predominance of the active over the passive, and

having as the foundation of the whole, not to expect more from life than it is capable of bestowing. || A life thus composed, to those who have been fortunate enough to obtain it, has always appeared worthy of the name of happiness. And such an existence is even now the lot of many, during some considerable portion of their lives. The present wretched education, and wretched social arrangements, are the only real hindrance to its being attainable by almost all. (18—19・214—215)

【一八頁左余白に「幸福ハ享ク可ラズト云フト虽モ不幸ヲ除クニハ異論ナカル可シ況ヤ酒色遊蕩一時ノ快樂ヲ以テ幸福トセサル位ノコト此方モ承知タ」と毛筆により書き込みが、また一八頁下余白に「ブックチーフ ペッシーフ 学者ノ精神ロニ在ル可シ」と毛筆による書き込みが、ちひび同く一八頁下余白に「*Imaginary only*」と鉛筆による書き込みがある。】

論拠が十分であるならば、最初の反対論は問題の根本を衝くものであろう。こゝの「人間がいかなる幸福も持てないものであるならば、幸福の達成は道德の目的ではあり得ないし、またいかなる合理的行為の目的にも成り得ないからである。但し、そうした場合でも功利説を弁護する余地はある。功利は幸福の追求ばかりでなく、不幸の防止や緩和も含んでいるからである。だから先の企画〔幸福の追求〕が幻を追うようなものだとしても、それだけにかえつて後の企画〔不幸の防止や緩和〕が実現されるべき範囲は増々広がり、ま

たその必要もそれだけ切実となるであろう。少くとも人類が人生は生きるにふさわしい、と考へ、ある条件の下でノヴァーリスが勧めたような一斉自殺行為によつて現世の苦難から逃避しようとしないう限り、そうである。しかし、人間の生活が幸福であることは不可能である、とこうまであからさまに主張されると、この主張はこじつけでないにしても、少なくとも言い過ぎである。もし幸福が快適極まる興奮状態の継続をいうのであれば、確かにそんなものは在りえないことであろう。快楽の高揚状態は数瞬間続くにすぎず、時に断続して数時間が数日間続くにすぎない。それも時どき現われる火花の享樂であつて、永久不変の炎ではない。このことを、幸福こそ人生の目的である、と教えた哲學者たちは嘲笑者に劣らずよく承知してゐた。彼らのいう幸福とは歓喜の生活ではなかつた。数少ない一時的な苦痛と、数多くの様ざまな快楽とからなり、受動的な快楽より能動的なものが圧倒的に多く、しかも全体の基調として、人生が与えうる分以上を人生に期待しないという態度をもつような生存の中にある快喜の幾瞬間を意味したのである。このように構成された人生は、運よくそれを味わうことができた人々にとつて、いつでも幸福の名に値するように思われた。そしてこのような生存は、現在でも多数の人々にとつて、その人生のかなりの部分を占めるに至つてゐる。今日のでたらめな教育、でたらめな社会環境こそ、ほとんどのすべての人々がこのような生存に到達するのを妨げているたゞ一つの眞の障害である。

(437下—474上・127上—128上)

(註) The objectors perhaps may doubt whether human beings,

福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再現 (一)

if taught to consider happiness as the end of life, would be satisfied with such a moderate share of it. But great numbers of mankind have been satisfied with much less. The main constituents of a satisfied life appear to be two, either of which by itself is often found sufficient for the purpose: tranquillity, and excitement. With much tranquillity, many find that they can be content with very little pleasure: with much excitement, many can reconcile themselves to a considerable quantity of pain. There is assuredly no inherent impossibility in enabling even the mass of mankind to unite both: since the two are so far from being incompatible that they are in natural alliance, the prolongation of either being a preparation for, and exciting a wish for, the other. It is only those in whom indolence amounts to a vice, that do not desire excitement after an interval of repose; it is only those in whom the need of excitement is a disease, that feel the tranquillity which follows excitement dull and insipid, instead of pleasurable in direct proportion to the excitement which preceded it. When people who are tolerably fortunate in their outward lot do not find in life sufficient enjoyment to make it valuable to them, the cause generally is, caring for nobody but themselves. To those who have neither ||

104 (1314)

public nor private affections, the excitements of life are much curtailed, and in any case dwindle in value as the time approaches when all selfish interests must be terminated by death: while those who leave after them objects of personal affection, and especially those who have also cultivated a fellow-feeling with the collective interests of mankind, retain as lively an interest in life on the eve of death as in the vigour of youth and health. Next to selfishness, the principal cause which makes life unsatisfactory, is want of mental cultivation. A cultivated mind—I do not mean that of a philosopher, but any mind to which the fountains of knowledge have been opened, and which has been taught, in any tolerable degree, to exercise its faculties—finds sources of inexhaustible interest in all that surrounds it; in the objects of nature, the achievements of art, the imaginations of poetry, the incidents of history, the ways of mankind past and present, and their prospects in the future. It is possible, indeed, to become indifferent to all this, and that too without having exhausted a thousandth part of it; but only when one has had from the beginning no moral or human interest in these things, and has sought in them only the gratification of curiosity.

(19—20・215—216)

〔一九頁右余白に「所謂守銭奴ニハ楽アル可ラズ」と、二〇頁左余白に「錢ヲ愛テハ活潑心ヲ保ス可ラズ」と各々毛筆による書き込みがある。〕

反対論者たちは恐らく次のように疑うであろう。幸福を人生の目的と考えるように教わつたら、人間は果してそのようにつましい幸福にあずかるだけで満足するだらうか、と。だが人類の大多数はこれまでどつとわずかで満足してきたのである。満足した生活のおもな内容は二つあり、そのどちらか一方だけでしばしば目的を達するに十分である。その二つとは平静と興奮である。平静さが豊かに恵まれておれば、ほんのわずかの快楽で満足できよう。興奮が多ければ、かなりの量の苦痛でも我慢できる。大衆が両方を兼備することなど金輪際不可能だ、とは言いきれない。この二つは両立しないどころか自然に結びつくものであり、一方が長びけば他方が準備され、他方を熱望させるはずののだからである。ただ怠け心が高じて悪徳となつている人だけが休息の後にも興奮を求めない。また病的に興奮を求める人だけが興奮後の平静を先だつた興奮に比例して愉快には感ぜず、退屈で気の抜けたものと感じるのだ。かなり幸福な境遇にある人が、人生に価値を認めるに足る程の享楽を見い出さないのは、およそ自分のことしか考えないからである。公私にわたつて愛情を欠く人は人生の興奮は非常に削減されたものとなり、いずれにせよ一切の利己心が終熄する死期に近づくにつれて、その価値は減つてゆくほかない。これに反して自分の死後に個人的愛情の対象を残す人、とりわけ人類の全体的利益によつて同胞感情を開発

した人は、死の前夜でも若さと健康に恵まれて元氣旺盛であつたときと変わらず、人生に澆刺たる興味を持ち続けるのである。利己心に次いで人生に不満を抱かせる主な原因は精神の開發不足である。開發された精神——といつても哲學者の精神をいうのではなく、知識の泉が開かれており、かなりの程度その能力を鍛えるように教つてゐる精神——は周囲のあらゆるものに反するものにならぬ興味と源泉を見いだす。例へば自然の事物、芸術品、詩的構想、歴史上の出来事、過去から現在にわたる人類の足跡、さらにはその將來の展望などだ。成程これらすべてに對して無関心になることかある。それもその千分の一も味むら返らずにたゞなぐさなぐさなることならある。けれどもそんなことは人がこれらのものにはじめから道德的・人間的な興味を全く持たず、これらのものご好奇心を満足せぬことばかり求めた場合に限るのである。

☞ Now there is absolutely no reason in the nature of things why an amount of mental culture sufficient to give an intelligent interest in these objects of contemplation, should not be the inheritance of every one born in a civilized country. As little is there an inherent necessity that any human being should be a selfish egotist, devoid of every feeling or care but those which centre in his own miserable individuality. Some thing far superior to this is sufficiently common even now, to give ample earnest of what the human species may be made. Genuine private

題名生案本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 肆編 (1)

affections, and a sincere interest in the public good, are possible, though in unequal degrees, to every rightly brought up human being. In a world in which there is so much to interest, so much to enjoy, and so much also to correct and improve, every one who has this moderate amount of moral and intellectual requisites is capable of an existence which may be called fenviable; and unless such a person, through bad laws, or subjection to the will of others, is denied the liberty to use the sources of happiness within his reach, he will not fail to find this enviable existence, if he escape the positive evils of life, the great sources of physical and mental suffering——such as indigence, disease, and the unkindness, worthlessness, or premature loss of objects of affection. The main stress of the problem lies, therefore, in the contest with these calamities, from which it is a rare good fortune entirely to escape; which, as things now are, cannot be obviated, and often cannot be in any material degree mitigated. Yet no one whose opinion deserves a moment's consideration can doubt that most of the great positive evils of the world are in themselves removable, and will, if human affairs continue to improve, be in the end reduced within narrow limits. Poverty, in any sense implying suffering,

102 (11111)

may be completely extinguished by the wisdom of society, combined with the good sense and providence of individuals. Even that most intractable of enemies, disease, may be indefinitely reduced in dimensions by good physical and moral education, and proper control of noxious influences; while the progress of science holds out a promise for the future of still more direct conquests over this detestable foe. And every advance in that direction relieves us from some, not only of the chances which cut short our own lives, but, what concerns us still more, which deprives us of those in whom our happiness is wrapt up. As for vicissitudes of fortune, and other disappointments connected with worldly circumstances, these are principally the effect either of gross imprudence, of ill-regulated desires, or of bad or imperfect social institutions. All the grand sources, in short, of human suffering are in a great degree, many of them almost entirely, conquerable by human care and effort; and though their removal is grievously slow——though a long succession of generations will perish in the breach before the conquest is completed, and this world becomes all that if will and knowledge were not wanting, it might easily be made——yet every mind sufficiently intelligent and generous to bear

a part, however small and unobtrusive, in the endeavour, will draw a noble enjoyment from the contest itself, which he would not for any bribe in the form of selfish indulgence consent to be without. (20—22. 216—217)

〔二頁下余白に「一手附金」と鉛筆による書き込みがあり、二頁左余白に「事ノ成功ヲ期スルハ其路悠遠ナリト虽モ勉強丈ケニテモ業ナリト云ハサルヲ得ズ」と毛筆による書き込みがある。〕
 ついで以上〔圖の続き〕のような觀照の対象に、理解に富んだ興味を抱くに足るだけの精神の開發が、文明國に生まれたすべての人に受け継がれてならない理由は本来絶対に成り立たない。同様に、人間はだれもが利己的な自己中心主義者で、感情や配慮を憐むべき自分の独自性にしか集中できないという本質の必然性もないのである。これよりずっと秀れた状態が今日でもごく普通にみられ、人間という種族がどう造り上げられるかについて十分な前兆を示している。純粹な私的な愛情と公共善への誠実な関心とを持つことは、程度の差はあつても、正しく育つた人ならだれにでも出来ることである。こんなに沢山興味を引くものがあり、こんなに沢山享受すべきものがあり、さらにまたこんなに沢山は正し改善すべきものがある。この世界では、この程度の普通にみられる道德的・知的資質を備えた人なら、誰もが羨むに足る生活を送ることが出来る。そしてこの種の人には、悪法のためや他人の意志に屈従したため、手近な幸福の源泉を利用する自由を奪われているのでない限り、人生の明々白々な善悪——貧富、病氣とか、愛するものの冷淡、無能、若死と

いつた肉体的並びに精神的苦悩の大根源——を避ければ、この羨むに足る生活を見つけ損ねることはないのである。従つて問題の焦点はこのような災害との抗争にある。災害を完全に免れることは稀有の幸運である。現状ではこのような災害はなくせない。大幅に緩和することさえなかなか出来ないのである。にも拘らず多少とも傾聴に値する意見の持ち主ならば、世界の明々白々な大害悪の大半はそれ自体なくせるものであること、また人事諸般の改善が続く限り、ついには狭い範囲に縮少してしまふであろうことを疑うまい。窮乏ほどんな意味でも苦悩を含むが、やがて社会の英知が個人の良識及び先見に支えられて完全にこれを絶滅させるであらう。人類の強敵中最も手強いものであるあの病氣をさへ、適切な体育と道徳教育を与え、さらに有害な影響を適当に統制すれば、限り無くその範囲を縮小させられるのである。他方、科学の進歩はこのいまわしい敵を將來もつと直接的に克服する希望を与えている。そして、この方面で前進が行われるたびに、われわれ自身の生命を縮める機会が幾分か除かれるばかりでなく、さらに重要なことには、われわれの幸福が託されている人々を奪い去る機会も幾分か除かれるのである。運命の転変、そのほかままたらぬ浮き世への失望などは主としてはなだしい無分別や統制を誤つた欲望の結果か、それとも悪い、または不完全な社会制度の結果である。つまり人間の苦悩の主な根源はすべて人間の配慮と努力によつて大部分——その多くはほぼ完全に——克服できるのである。そしてこれらの苦悩の除去は遺憾ながら遅々たるものではあるが——この克服が完成し、この世が、意志

福沢手沢本 J. S. Mill *Utilitarianism* 再現 (一)

と知識とが不足しない限り容易に造くり変えることの出来る立派な世界となるまでには、長い幾世代もの人々がそれを得ることなく傷つき斃れて行くであらうか——それでも尚どんなに小さく目立たぬ役割にせよ、この努力の一端を担う程の英知と慈愛を持つ人ならば、必ずやこの闘いそのものを高貴な楽しみとするであらう。そして勝手気ままな振る舞を認めてやるといふ甘言でつられても、この楽しみを捨てることを承知すまう。(475上—476下・138下—139上)

(B) And this leads to the true estimation of what is said by the objectors concerning the possibility, and the obligation, of learning to do without happiness. Unquestionably it is possible to do without happiness; it is done involuntarily by nineteen-twentieths of mankind, even in those parts of our present world which are least deep in barbarism; and it often has to be done voluntarily by the hero or the martyr, for the sake of something which he prizes more than his individual happiness. But this something, what is it, unless the happiness of others, or some of the requisites of happiness? It is noble to be capable of resigning entirely one's own portion of happiness, or chances of it: but, after all, this self-sacrifice must be for some end; it is not its own end; and if we are told that its end is not happiness, but virtue, which is better than happiness, I ask, would the sacrifice be made if the

111 (111111)

hero or martyr did not believe that it would earn for others immunity from similar sacrifices? Would it be made, if he thought that his renunciation of happiness for himself would produce no fruit for any of his fellow creatures, but to make their lot like his, and place them also in the condition of persons who have renounced happiness? All honour to those who can abnegate for themselves the personal enjoyment of life, when by such renunciation they contribute worthily to increase the amount of happiness in the world; but he who does it, or professes to do it, for any other purpose, is no more deserving of admiration than the ascetic mounted on his pillar. He may be an inspiring proof of what men can do but assuredly not an example of what they should

(22—23・217)

〔二三頁の右余白に「良將ガ討死シ義士ガ身ヲ殺スモ其不幸ヲ以テ他ノ幸ヲ致サンガ為メノミ若シ然ラザレバ山伏ガ業ヲスルモノニ異ナラズ唯奇ヲ示スニ足ルノミ」と毛筆による書き込みがある。〕さて以上(四)の続きの議論から、幸福なしにやつていくことを習得する可能性と義務に関して反対者達が言っていることの正しい評価がでてくる。疑いもなく幸福なしにやつていくことは可能である。人類は二〇人中一九人までが非自発的にそうしている。つまりわれわれが生きている世界の中の最も野蛮でない部分においてやえや

うである。英雄や殉教者は自分一個の幸福以外のある価値を重んじ、そのためにしばしば自発的に幸福を捨てた生活を送らねばならなかつた。しかしこのある価値が他人の幸福でもその要件でもないとするれば、果してなんであるのか。自分に授かつた幸福またはその機会を完全に放棄できるというのは気高いことである。しかし煎じ詰めれば、この自己犠牲は何かの目的のためでなければならぬ。自己犠牲は自己目的になれないのである。幸福ではなくて幸福よりもさらに善い徳が目的であるというなら、私はたずねよう。英雄なり殉教者なりは、他人に同じ様な犠牲を免れさせると信じたからこそ犠牲となつたのではないか。自分が幸福を放棄したところで同胞になんの成果ももたらさず、同胞に自分と同じ運命を辿らせ、同胞を幸福放棄者の立場に置くだけであると考へたならば、果して犠牲者になつたであらうかと。この様な幸福放棄が世界中の幸福総量を増加するために十分役立つときには、いつでも個人的な人生享受を自ら捨てることのできる人達に大いなる栄光あれど、これが以外の目的のために幸福を放棄する人、またそう称する人には柱のつてつべんに登つた善行者なみの敬意を払つて置けば十分である。この種の人は、人間にできることの心強い証明を与えることはできても、人間のなすべきことの模範にならないことは確かである。(476下—477下・130上—130下)

(5) Though it is only in a very imperfect state of the world's arrangements that any one can best serve the happiness of others by the absolute sacrifice of his own,

yet so long as the world is in that imperfect state, I fully acknowledge that the readiness to make such a sacrifice is the highest virtue which can be found in man. I will add, that in this condition of the world, paradoxical as the assertion may be, the conscious ability to do without happiness gives the best prospect of realizing such happiness as is attainable. For nothing except that consciousness can I raise a person above the chances of life, by making him feel that, let fate and fortune do their worst, they have not power to subdue him: which, once felt, frees him from excess of anxiety concerning the evils of life, and enables him, like many a Stoic in the worst times of the Roman Empire, to cultivate in tranquillity the sources of satisfaction accessible to him, without concerning himself about the uncertainty of their duration, any more than about their inevitable end.

(23—24 · 217—218)

〔二三頁右余白に〕幸ヲ求メザルノ誠心マリテ始テ幸ヲ致ス可シ
金ヲ欲スル者ハ金ヲ得ヌ名ヲ欲スル者ハ名ヲ得ズ生徒ヲ招ク學校ノ
常ニ繁昌セス」と毛筆による書き込みがある。〕

だれかが自分の幸福を全部犠牲にして他人の幸福に最大の貢献が
できるのは、世の中の仕組みが非常に不完全な状態である場合に限
られる。しかし世の中がこんな不完全な状態にある限り、いっさ

福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再現 (1)

も犠牲を払う覚悟を持つことが人間にとって最高の徳であることを私は十分認めざるものである。これに付け加えて、世の中がこんな不完全ならば逆説を弄するようだが、意識的に幸福なしでやろうと努力することは、人間の力で達成できる幸福を表現してゆく上で最善の見通しを与えざるものだとはいおう。というのは、この意識こそ人間に最悪の宿命や悪運をさそふ人間を屈服させる力を持たないと感じさせ、人生の巡り合せに超然たらしめるものだからである。いったんこう感じれば人は人生の諸悪についてくよくよすることから解放される。そしてローマ帝国の最悪の時期に巡り合せた多くのストア派の哲人の様に、平静のうちにも手近な満足の源泉を開発し、それに避け難い終局があることに心を悩ませず、やらざれがらいつまでも続くかたじけなく思ふ煩うことがなくなるのである。(註ト・130—131)

☞ Meanwhile, let utilitarians never cease to claim the morality of self-devotion as a possession which belongs by as good a right to them, as either to the Stoic or to the Transcendentalist. The utilitarian morality does recognise in human beings the power of sacrificing their own greatest good for the good of others. It only refuses to admit that the sacrifice is itself a good. A sacrifice which does not increase, or tend to increase, the sum total of happiness, it considers as wasted. The only self-renunciation which it applauds, is devotion to the happiness, or to

111 (11111)

some of the means of happiness, of others; either of mankind collectively, or of individuals within the limits imposed by the collective interests of mankind. (24. 218)

〔左余白に「自禁シテ從テ益スル所ヲルヲ要ス道德上ニ經濟ノ論ヲ當ツ可シ」と毛筆による書き込みがある。〕

話は変わるが、功利主義者は献身という徳行がストア派や先驗論者が持つのと同等の正当な権利からして自説のものであることを主張し続けなければならぬ。功利主義道徳は、他人の善のためならば、自分の最大の善でも犠牲にする力が人間にあることを認めてくる。犠牲それ自体を善と認めないだけである。幸福の総量を増やさない犠牲、あるいは増やす傾向を持たない犠牲は無駄であると考へるのである。功利主義が称える自己放棄はただ一つ、他人の幸福またはその手段への献身だけである。この場合に他人とは、人類全体であると人類の全体的利益の範囲内にある個人であるとを問わぬ。

(前二一節上・一七)

⑩ I must again, repeat, what the assailants of utilitarianism seldom have the justice to acknowledge, that the happiness which forms the utilitarian standard of what is right in conduct, is not the agent's own happiness, but that of all concerned. As between his own happiness and that of others, utilitarianism requires him to be as strictly impartial as a disinterested and benevolent spectator. In the golden rule of Jesus of Nazareth, we read the complete spirit of

the ethics of utility. To do as one would be done by, and to love one's neighbour as oneself, constitute the ideal perfection of utilitarian morality. As the means of making the nearest approach to this ideal, utility would enjoin, first, that laws and social arrangements should place the happiness, or (as speaking practically it may be called) the interest, of every individual, as nearly as possible in harmony with the interest of the whole; and secondly, that education and opinion, which have so vast a power over human character, should so use that power as to establish in the mind of every individual an indissoluble association between his own happiness and the good of the whole; especially between his own happiness and the practice of such modes of conduct, negative and positive, as regard for the universal happiness prescribes: so that not only he may be unable to conceive the possibility of happiness to himself, consistently with conduct opposed to the general good, but also that a direct impulse to promote the general good may be in every individual one of the habitual motives of action, and the sentiments connected therewith may fill a large and prominent place in every human being's sentient existence. If the impugnors of the utilitarian morality

represented it to their own minds in this its true character.
I know not what recommendation possessed by any other morality they could possibly affirm to be wanting to it: what more beautiful or more exalted developments of human nature any other ethical system can be supposed to foster, or what springs of action, not accessible to the utilitarian, such systems rely on for giving effect to their mandates. (24—25・218—219)

〔二四頁のチェック(✓)の書き込みは毛筆によるものか鉛筆によるものか判定不明である。二五頁のラインの書き込みも同様であるが、これは極めて薄い。また二五頁の what から三行下の more に至るまで文と交差する形で毛筆(✍)によるラインがひかれているがこれも毛筆のラインとしては極めて薄い。〕

功利主義を攻撃する人達がほとんど認めてくれないことなので、ここでくり返して言っておきたい。功利主義が正しい行為の規準とするのは、行為者個人の幸福ではなく、関係者全部の幸福なのである。自分の幸福と他人の幸福とはさまにあつて、功利主義が行爲者に要求するのは、利害関係をもたない博愛ある観察者のように厳正中立であれ、ということである。ナザレのイエスの黄金律の中に、われわれは功利主義倫理の完全な精神を読みとる。おのれの欲するところを人に施し、おのれの如く隣人を愛せよ、というのは功利主義道徳の理想的極致である。この理想に近づぐ手段として功利はこう命ずるのであろう。第一に、法律と社会の仕組みが、各人の幸

福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再現(一)

福や(もつとも實際的にいえば)利益をできるだけ全体の利益と調和するように組み立てられていること。第二に、教育と世論が人間の性格に対してもつ絶大な力を利用して、各個人に自分の幸福と社会全体の善とは切つても切れない関係があると思わせるようにすること。とくに、社会全体の幸福を願うならば当然行うべきだと思われる行動様式——さし控えたり、積極的に行つたり、という——を実行することが、自分の幸福と切り離せない関係にあることを教えるべきである。こうすれば人間は、社会全体の善に反するような行為を押し通して自分の幸福を得ようなどと考えなくなるであろう。さらには全体の善を増進しようというひたむきな衝動が各人を習慣的に動かすようになり、この衝動にともなう心情が各人の情操面で大きく顕著な位置を占めるようになるだろう。功利主義道徳を攻撃する人々が、このような功利主義の本当の性格を知つた後で、他の道徳のどんな美点がこの道徳に欠けているといえるのか。他のどういう倫理体系が人間性をこれ以上に美しく気高く育てると考えられるのか。またその倫理体系は、功利主義の持たないどんな動因に基づいてその命令を実行させようとするのか、私にはわからない。(478上—479上・181上—182上)

一一五 (一三三ウ)